

一本刀土俵入 二幕五場

長谷川伸



〔序幕〕 第一場 取手の宿・安孫子屋の前

第二場 利根の渡し

〔大詰〕 第一場 布施の川べり

第二場 お蔦の家

第三場 軒の山桜

駒形茂兵衛 老船頭 筋市

お蔦 清大工 河岸山鬼一郎

船印彫辰三郎 お君 酌婦お松

船戸の弥八 いわしの北 同 お吉

波一里儀十 籠彦 博芳久太郎

堀下げ根吉 おぶの甚太

一 伊兵衛・女房おみな・料理人・帳付け・通り  
がかりの人々・近所の人々・赤金の升・盆持  
ちの良・渡しの船夫・渡しの客・子守子（一）

二 二）・八公・買物の男女・そのほか。



## 〔序幕〕

### 第一場 取手の宿・安孫子屋の前

常陸の国取手は水戸街道の宿場で利根を越え  
ると下総の国。渡しはその近くにゐる。

取手の宿場街の裏通りにある茶屋旅籠で安孫子屋  
の店頭は、今が閑散な潮時外れである。それ  
は秋の日の午後のこと。

（安孫子屋は棟の低い二階建てで、前と横とが

T字型に往来になつてゐる。角店のこの家は突ツつきが広い土間、その他は外から余り見えない。階下と二階の戸袋は化粧塗りの、漆喰細工で、階下は家号を浮きあがらせた黒地に白、二階は色漆喰の細工物で波に日の出）

（安孫子屋の角柱の処に菊の鉢が一つ置いてある。外側の窓の脇に榎の老木があり竹垣を四方に結つてある。その中で秋草が少し咲いている）

（二階は三尺障子が閉まつている）

店の前に料理人、帳付け、酌婦お吉、お松、その他が立つて、道路の向うでしている喧嘩の方を見ている。そつちの方から喧嘩する男の聲が聞えているが、だれの眼にもまだ見えていない、二階では近在からきている放蕩者が、酌婦を相手に遊んでゐると見え、三味線の爪弾きの音が聞える。

料理人 （爪先立ちをして喧嘩の方を見る）

お吉 (料理人に) 見える。

料理人 うんにや見えねえ。

お松 (少し酔っている) こんな時はのツぼが得だと思つたらそうでもないんだね。

料理人 何をいやがる。おツ、人が出てきた。

お松 まさか鬼は出てきツこないさ。

帳付け お松どんお前まえまた酔つてるな。酔うもいいがお前のは質がよくないからなあ。やあ、人がみんな押し出されたように横町から出てきたぞ。

子守子 (息せき走ってくる)

料理人 あれツ雪崩なだれを打つて人が——あ、駈ける、

みんな駈けてこつちへ来る。

お吉 (子守子を捉まえそうにして) だれが喧嘩

してるんだい。

子守子 船戸ふなどの弥やあ公こうなんだよ。

お松 えッ、弥八の奴また喧嘩か、仕様のない男

だねえ、あれと来ちやあ。

帳付け お松どんそんなことを当人の前でいうじや

ないぜ、頭を半分ブツ欠かかれるか知れないからな

あ。

お松 いくらあたしだつて、真逆まさかあの無法者の前

じゃ、迂闊に口を聞きやしませんよ。お蔭さんのいい草じやないが、体をやくぎに持扱もちあつかつてしまつても、まだこれで命は惜しいや。

料理人 (熱心に見続けている) あツ有難え、喧嘩はどうとうこつちへ流れてきそうだ。やあ、追つかけてるのは弥あ公だが、逃げてくるのはどこの若夫婦らしい。

お吉 あれッ、だれだか、仲人ちゆうにんにはいった——。

お松 どれどれ。

帳付け (お松に) おいおい、滅多なことはいつ

ちやいけないよ。家が迷惑するから。

お松 (耳にもかけず) ありや二、三日前に中食

をしてつた日光街道の木崎きさきの博労だよ。

帳付け 叱ッ叱ッ、黙つた黙つた。

お松 (口を掌で叩き) あわわわ。

土地の男女が逃げるようにやってきて、二つの群れとなり、二つの道の端に佇んで喧嘩を見ている。婚礼して間もないらしい若い夫婦

伊兵衛、おみなが、手を執り合つて逃げてくる、後から船戸の弥八（二十八、九歳）船夫にて乱暴者が追いかける。

弥八 （伊兵衛を捉える）何をしやがる。（振り払う伊兵衛を又捉えて引戻す）

おみな （夫の大事と引返し、おろおろと伊兵衛を氣遣う）

博勞木崎の久太郎（四十二、三歳）仲裁しようとして弥八に追いつく。

久太郎 哥兄や、まあさ、勘弁してやつてくれ。当人だつて詫びをいつてるんだ。なあ、もういい加減に勘弁してやつてくれ。俺からも頼むからよ。な、もういいだろう。根も葉もあることではねえ、足を踏んだ踏まねえの喧嘩じゃねえか。

弥八 厭だ。

久太郎 何ッ。（むツとしたが、氣を取り直し）そういつたものじゃねえ。

弥八 黙つてろい。借セツ。（久太郎が持つていた馬の脊を奪つて、伊兵衛を打つ）

おみな あれッ。（伊兵衛を庇わんとして、弥八に打たれる）

伊兵衛 （憤然として弥八の腕を押え）温和しくしていればいい気になり、畜生に穿かせる物でよくもぶつたな。

おみな （おろおろと伊兵衛に取り縋り、何かいおうとすれど声が出ぬ）

弥八 馬の脊でヒツ敲いてやつた、それがどうした。

久太郎 どうもしねえ、こうしてやらあ。（馬の脊を引ツ手繰り弥八を打つ）

弥八 あ痛え。やい止せ、痛えやい。（久太郎から馬の脊を奪わんとする）

久太郎 （いつかな放さず）この野郎。いい加減にのさばれ。

弥八 寄越さねえと蹴殺すぞ。

伊兵衛 （弥八の脚をとつて引く）

弥八 あわわ。（引ツ繰り返る、直ぐ起きあがるを、久太郎が馬の脊で打つて倒す、又起きるを伊兵衛が蹴り倒す）

久太郎 ちツとは懲りたか、この大馬鹿野郎。

伊兵衛 顔をよく見憶えたから、川向うへ来てみる

がいい、ただでは帰しはしないから。

弥八 (瓦破と起き) 待つてろツ。(安孫子屋へ

飛び込む)

料理人 あれツ。(家の中へ向つて) 庖丁を片付け

ろ、庖丁を、(駈け込む奥の方で声がする) 庖丁

を。(帳付けその他も駈け込む)

久太郎、伊兵衛夫婦は別々の道へ走つて去

る。見ていた男女も傍杖を恐れて去る。お松

とお吉だけが、家の前に小さくなっている。

家の中でドタバタ音がする。皿の壊れる音、

棚から物の落ちる音などがする。

弥八 (声) 退きやがれ。あ奴等突ツ殺しちゃう

んだ。退けえツ、退けツ。

料理人 (声) 何を乱暴するんだ、いけねえつたら、

放せ、あッ危ねえツ。

二階の障子が開いて、酌婦お薦(二十三、四

歳) ほろりと酔つた顔を出す。

お薦 (口に啣えた楊子を吐き棄て、店の奥を覗

き加減に見る、が見えないので、居どころを替え

る) 弥八 (刺身庖丁を持ち、肌脱ぎとなり、往来へ

飛び出す)

料理人その他が店の入口まで追つて出る、そ

れから先へはだれも進み出ぬ。お吉とお松と

は店へ駈け込む。

お薦 (柱にもたれ、髪を櫛で搔きながら下を見

ている)

弥八 さあど奴もこ奴も命をフン奪つてやるから

出てこい。さあ。(ギロギロ見廻し) 畜生、みん

な隠れやがったな。

駒形茂兵衛(二十三、四歳位) 汚ない単衣物

一枚、素足に草鞋を穿く、力士志願で親方を

とり、漸く付け出しにはなつたが、前途がな

いと親方に見限られ、旅興行先で追い払われ

て通りかかる。

茂兵衛 (何とも知らず来り、弥八に行き合う)

弥八 (庖丁を擬して睨む)



茂兵衛 な、なにをするんだ、わしが知るものか。

弥八 野郎ッ。(逃げ廻る茂兵衛を追い廻す)

茂兵衛 (空腹のために、よろめき勝ちで、再々危うくなる) わしは何も知らぬ、な、なにをするんだこの人は。(逃げ廻る)

料理人その他はハラハラするのみで、挺身して弥八を押える者が無い。

お蔭 (じつと見ていて、疔癩を起し、盃洗を

とつて水を弥八に浴びせる)

弥八 ぷッ。(顔を片手でツルリと撫ぜる)

お蔭 水をかぶつて少しは気が落ちついたかい弥

あ公。

弥八 何だあ。(二階だと心づき仰ぎ見て) 手前

お蔭の阿魔だな。

料理人 (素早く弥八の手から庖丁を取ろうとして

仕損じる)

弥八 何をしやがる。(庖丁を振り廻す)

料理人 うわッ。(店へ逃げ込む)

茂兵衛 (喘んで息を安めている、弥八の行動

に眼をつけ、時々はツとする。二階のお蔭にも眼

を向ける)

弥八 やいお蔭、よくも俺に水をヒツかけやがっ

たな。下へこい、叩ッ斬つてやるから。

お蔭 何をいつてるんだい。

弥八 降りてこねえな。ようしツ、俺の方から

押掛<sup>おしか</sup>けて行つてやる。

お蔭 来られるなら来るがいい、ここにいるお客

さまを、だれだと思つてゐるんだ、流れの三太郎

親分だよ。

弥八 えッ、俺ンとこの親分がきてるのか、こい

つはいけねえ、本当かおい。

お蔭 嘘だと思つたらあがつといで、親分に叱ら

れるのも稀<sup>たま</sup>にや面白いだろう。

弥八 (庖丁を抛り出し) べら棒め、面白く叱ら

れる奴があるもんかい。(茂兵衛に) やい、手前

よくも俺を大勢と一緒に成つて殴りやがったな。

料理人 (庖丁を拾いとり、傍にいる男に板場へ持

たせてやる)

茂兵衛 わしは今ここを通りかかったばかりで、何

があつたか、ちツとも知らないのだ。

弥八 胡麻化すない。俺は殴られている時に、

ちヤンと眼を開いてたんだから、どんな奴とどんな

な奴が殴ったか知ってるんだ。手前も確かに俺を

殴った。

茂兵衛 そんな難題を吹ツかけては困る。

料理人 その人のいう通りだ。弥あさん、お前を

殴ったのは、さっきの博労と若え男とだけだ。

弥八 手前の知ったことか。(茂兵衛に)手前、

職は何だ。(どこの三下かの意)

茂兵衛 角力取りになつている。

弥八 取り的か。

茂兵衛 そうだ取り的だ。横綱でも大関でも、一度

はみんな取り的だった。

弥八 ふんどし、担ぎめ、豪儀ごうぎそうな口をき聞くな

い。さあ野郎、俺と一緒に利根川とねがわ沿へべりこい、二、

三番揉んだ揚句、川の中へ飛び込ませてやる。

茂兵衛 水ならもう充分だ。

弥八 手前泳ぎを知らねえのか、犬いぬツ搔かきも出来

ねえのか。

茂兵衛 なあにそうでない、わしはきのうから水ば

かり飲んで。(はツと心づいて) 水中みずあたりが怖いか

らだ。

お薦 (頬杖をついて見下している) 取り的さ

ん、そんな人に交際つきあつてないで、さツさで行つて

おしまい、とどの詰りは、二つ三つ殴られた揚句

に、いくらか銭をとられちまうよ。

弥八 (お薦を睨む)

茂兵衛 なあに、銭なんか一文もない。

お薦 へええ。一文なしで何処まで行くの。

茂兵衛 一先ず江戸へさ。

お薦 ここから千住までだつて八里あるよ。第

一、その川を渡るつたつて、十六文銭がいるん

だ、それを一文なしでどうするんだい。

茂兵衛 どうかなるだろう。

弥八 一文なしと聞いちや、可哀そうで殴れもし

ねえ。

お薦 可哀そうだつて、あたしあ又、一文なしと

聞いて、落胆がっかりしたと思うた。

弥八 厭いやなことばかりいう阿魔だ。

お薦 前世ぜんせいでは敵同士だったかも知れないね。

弥八 家の親分が惚れてなきや。とツくの昔に腕

の一本ぐらいヘシ折つてある阿魔だ——何だつて

こんな阿魔ちよの、どこが好いんだ。

お薦 そういつて親分に聞いてごらん、何て返事

するか。

弥八 知らねえ勝手に喋舌しゃべれ。(行きがけの駄賃

に茂兵衛に向い) 野郎。(蹴倒す) ヘッ、大飯食

いの癖に弱え奴だ。

茂兵衛 (よろよると倒れて) 待て。(起きあがり)

よいしょッ。(弥八の胸下に頭搗ずきをくれる)

弥八 あッ。(引ッ繰り返り、慌てて起きかけ、

へたへたとなる)

茂兵衛 (力なくよろめき、辛くも踏止まったが、

へたへたと坐る)

弥八 この取りのめ。ああ痛え。(跛びつをひく如く、

搗かれたところを押え) てッて。てッて。(折り

曲つて去る)

お薦 (弥八が倒れるのを見て喝采し、茂兵衛が

意気地なく坐るのを見て惘あきれる)

お松 (お吉に) この人、病人らしいけど、さす

が取理的でも力士は力士だねえ。

料理人 (門口に出て弥八の後姿を眺め) ヘッ、弥

あ公の無法者も頭搗きを一本力マされて、耐こたえた

と見えて、海老みたいに体を曲げて歩いてやが

る。いい気味だなあ。

お松 (お吉に) だけどさあ。(茂兵衛を指さし)

あれじゃ色気がなき過ぎるね。いくらあたしで

も、これを客に取れといわれたつて願ねがいさげだ。

からだらしが無なき過ぎるもの。

お吉 そりやそうだよ、あたしだつてさ。まだ弥

あ公の方がいくらか増しだ。

お薦 そうかねえ。

お吉 (前へ出て二階を見あげ) お薦ちやんてば

さつきから、いつもの伝でポンポン弥あ公に当つ

てたけど、いいのかえ。

お薦 どうなつたつて構かまやしないさ。

お松 (お吉に) およしおよし、あの人のお株かぶな

んだ。何をいつたつて徒むだ勞らうさ。やくそな女めなん

だからねえ。

茂兵衛 (漸く立ちあがり) もし、水を一杯飲まし

てくれますまいか。

料理人 水ならその先に井戸がある。遠慮なく沢山たくさん

飲んで行きな。(他の者に)今の草双紙の読み続  
きを聞こうぜ。八、読んでくんな。

八公 ええ。(料理人と共に内へ去る)

お吉 あたしも聞こう。(お松の手をとり)お出  
でよお前さんも。

お松 暇ッ潰しに聞かかねえ。(お吉と共に内へ  
去る)

茂兵衛 (井戸の方へ行き、飲みおわって戻り)ゴッ  
そあんで。(去りかける)

お蔭 ちよいとちよいと。

茂兵衛 (振り返つてお蔭を、ちよつと見ただけで  
歩く)

お蔭 取り的さん、お前さんと呼んでるんだ。

茂兵衛 わしか。何だね。

お蔭 お前さんどこが悪いんだ。

茂兵衛 おなかさ。

お蔭 食い過ぎたんだね。

茂兵衛 根ッから食わないからいけないんさ。

お蔭 あ、そうそう、一文なしだといったつけね  
え。

茂兵衛 乞食の真似すれば、人が銭をくれるといっ  
て教えてくれた者があるんだ。

お蔭 する気かえ。

茂兵衛 するもんか。わしは立派な関取になるんだ  
からなあ。

お蔭 親方がそういつたのかい。見込みがあると  
か何とか。

茂兵衛 親方は、見込みがないといった。

お蔭 へええ。それでも立派なお角力さんになれ  
るのかねえ。

茂兵衛 なれるさ、わしは一所懸命なもの。成れな  
かったらわし、どうしていいか判らなくなるな

あ。

お蔭 国はどこさ。

茂兵衛 上州だ。勢多郡の駒形こまがたという処だ。前橋か

ら二里ばかりの処さ。

お蔭 成り損そんつたら田舎へ帰つて、鋤すきくわを握る

さ、家うちはお百姓なんだろう。

茂兵衛 家か——家は灰になった。

お蔭 焼けちゃつたのかい。それで今、家がないの。

茂兵衛 無い。

お蔭 親兄弟が田舎にいるんじゃないのか。

茂兵衛 わしは一人ツ子。おやじは何処かへ行った

まんま、二十年も便りが無い。どこかでどうにか  
成つたんだろう。

お蔭 お母さんだけいるんだね。

茂兵衛 ああ居るよ。駒形の上広瀬川が見える処

に。

お蔭 なあんだ、家があるんじゃないか。

茂兵衛 なあに、そこはね、お墓さ。

お蔭 (急にホロリとなる)

茂兵衛 姐さんはここのおかみさんですか。

お蔭 酌とり女さ。白粉で面の皮が焼けてる阿婆摺  
れさ。

茂兵衛 阿婆摺れだつて、そんなことはない、わし

はそう思わない。(頭をさげて行きかける)

お蔭 お待ちよ取り的さん。お前、れつきとした

親類はないのかえ。

茂兵衛 無いこともないが、わしに構つてくれる者  
はない。

お蔭 みんな気を揃えて薄情でいやがるんだね

え。取り的さん、お前、本当に、精出して立派な

関取におなり、辛いことがあつたら、その薄情な

親類どもの顔を思い出して、一所懸命おやり、出

世したら故郷へ錦を飾つて、薄情揃いの奴等に、

土下座させておやり、屹といいい気味だよ。

茂兵衛 いやあ、わしは親類の者に見て貰いたいと

て、立派な関取にはならないんだ。

お蔭 おや。ああ、見せて喜ばず可愛い女がある

んだねえ。ホホホ、安くないねえ。

茂兵衛 わしは、故郷のお母さんのお墓の前で横綱

の土俵入りをして見せたいんだ、そうしたら、も

う、わしは良いんだ。

お蔭 取り的さん、お前さんもお母さんが恋しい

のだねえ。夢をよく見るだろうねえ。

茂兵衛 当り前だ。姐さんのお母さんも死んでし

まったのか。

お蔦 あたしのお袋は生きてるのさ。

茂兵衛 そんならわしより少し増しだ。

お蔦 なあに——生きていたとて、どうで満足に

は暮しちやいないに極まつてらあ。

茂兵衛 どうしてるか知らないのか。

お蔦 遠いんだよ、国が。だもの、判りやしない。

茂兵衛 どこだ。

お蔦 信濃の善光寺様よりもツと先き、越中富山

から南へ六里、山の中さ。

茂兵衛 信州から先なら、わしはまだ知らない。

お蔦 (思い出して泣けてくる顔を隠すとて、後

向きになり、声を低めて唄い出す、故郷の名物、

八尾やっおの小原節) おらちや友達や、さたね(菜種)

の花よ、ハア、どこいしよのしよ。

茂兵衛 (お蔦を見あげ、黙って行きかける)

お蔦 (唄いつづける) 盛り過ぎればオワラちら

ばらと。取り的さんちよいと。

茂兵衛 まだわしは八里余り歩かなくてはならない

のだ、行くよ。

お蔦 利根川の渡し船は十六文だよ。(帯の間か

ら巾着きんちやくを出して投げてやる)

茂兵衛 え。

お蔦 食べる物をあげたいけど、ここの家は吝しみッ

垂たれで話にならない。あたしの身上ありツたけや

るから、どこかで何か食べてお行き。

茂兵衛 貰あどつて行つてもいいのか。後で姐さんお前

が困りやしないか。

お蔦 あたしあ、年がら年中困りつづけどだから、

有つても無くつても同じことさ。遠慮しないで

持つてお行き。

茂兵衛 半分貰います。

お蔦 吝しみッ垂れな、今に横綱になる取り的さん

じゃないか。

茂兵衛 だつてな、わしも一文なしで困つてきたん

だ、姐さんだつて一文なしでは。

お蔦 やけの深酒ふかざけは毒と知りながら、ぐいぐい

呷あおつて暮すあたしに、一文なしも糸瓜へちまもあるもん

か。お前さん大食くろいだろうから、それじゃ足りな

い、これもあげるから持つてお行き。(櫛と簪を

髪からとる)

茂兵衛 いいよ、いいよ、そんなに貰わないでもいいよ。

お薦 持つて行くんだよ。(扱帯しじきに櫛簪しんざんを結びつける)

茂兵衛 へえ。

お薦 (扱帯しじきをたらし) さあ受取んな。何を愚図愚図してるのさ。おや厭だ、泣いてるの。

茂兵衛 わしこんな女の人にはじめて逢った。

お薦 横綱の卵は泣きペソだねえ。早くお取り、人が見るとおかしいよ。

茂兵衛 へえ。(櫛簪しんざんを手にとる)

お薦 (扱帯しじきを引きあげ) もし、だれかに咎とがめられたら、あたしに貰ったとおいい、出る処へ出て明あかりを立ててあげるから。

茂兵衛 姐さんは、名を何というんでしよう。

お薦 まだいわなかったね。取手とっての宿しゆくの安孫子屋あひこぢやにいるだる、まで名はお薦、越中八尾やちおの生れで二十四になる女だとはつきりいっておやり。

茂兵衛 へえ。(口の中で記憶するために繰返していつている)

お薦 その代り、取りのさん、屹とだよ、立派なお角力かくりきさんになつておくれね。いいかい。そうしたら、あたし、どんな都合ごうごをしたつて一度は、お前さんの土俵どひら入りを見に行くよ。

茂兵衛 あい——あい——屹かたやいりとなります。横綱やなぎに屹かたやいりとなつて、きょうの恩返しおんがしに、片屋入かたやいりを見て貰います。

お薦 どこへ飛んで行くか知れない体だけれど、楽しみにして角力かくりきが興おち行ちにきたら番付ばんぷいに気をつけてみるよ。あ、取りのさんの名は、まだ聞かなかったつけねえ。

茂兵衛 わしの親方の名なは立科磯右衛門たてしなと申します。

お薦 旅先から銭もあてがわず、に追い返すような親方の名ななんかどうだつていい。

茂兵衛 銭は六百くれました。これで何処へでも行けといつて。けど、みんな食つてしまった。

お薦 あらッ、江戸へ追い返されるのかと思つたら、お払い箱お払いばこ。じゃ、困るねえ。

茂兵衛 いえ、江戸へ行けば、親方おかしやのおかみさんに

絶つて、もう一度弟子にして貰います。おかみさんは、わしを可哀そうだといつていてくれますから。

お薦 何だか少し心細いねえ。

茂兵衛 いやあ大丈夫です、わしは、石に咬りついても横綱に出世しなけりや。

お薦 その料簡でみっちりおやり。名は何ていうのだい。

茂兵衛 わしは、駒形と名を付けて貰っています。

駒形というのは故郷の名だ。名は茂兵衛といいます。

お薦 駒形茂兵衛だね。

茂兵衛 あい。姐さん、わし出世して三段目になつ

ても、二段目になつても、幕へはいろいろが、三役になろうが、横綱を張るまでは、いかなことがあつても駒形茂兵衛で押通します。

お薦 それだとあたし直ぐわかつていいねえ。

じゃあ、お行き、左様なら。

茂兵衛 はい。(嬉し喜んで頭をさげ) 左様なら姐

さん。(行きかける)

お薦 (見送り) 出世を待つてるよ。

茂兵衛 はいッ。(振返り振返り去る)

お薦 (頬杖つき鼻唄をやっていたが、気がつき) あれ、まだこつち向いてお辞儀してる。そんなに嬉しかったのかねえ。(扱帯を振つて) 駒形

あ——。

船戸の弥八が、仲間の無法者、赤金の升公、

いわしの北公、盆持ちの良公を引きつれ、祭

礼の日の如く騒いで駈け来る、四人とも鍬の

柄その他を持つている。

升公 どこだ。どこだ。どこだ。

北公 わあッ、わあッ、わわッ。

良公 わッしよ、わッしよ。

弥八 (長脇差を帯し、先頭に立っている)

お薦 (冷然と見ている)

弥八 やあ、もう行つちやつたな。渡し場だ渡し

場だ。(駈け出しかける)

お薦 ちよいとちよいと、弥あさん、又暴れるの

かい、親分に叱られるよ。



弥八 お蔦の阿魔か。この嘘つきめ、親分は家に

いたぞ。

お蔦 そうだろう。さつき帰るといつて出て行つたもの。

弥八 嘘をつけこの阿魔。渡し場へ行つて、ふんどし担ぎを叩ツ挫け。(駄けだしかける)

お蔦 ヘン何だい、あたしが怖くつて、手出しがならないんだらう、ホホホ。

弥八 そうぬかせば、畜生、みんな、阿魔から先へ叩ツ挫け。

北公 だつてお前、あの女には家のがお前。(鼻の下へ指を二本やり) じゃねえか。

良公 怒られちゃ詰らねえから止せ。

弥八 渡し場へゆけ。それ行け、それ。

お蔦 (鼻唄に小原節をうたいながら、手をのばして酒徳利と盃洗をとり、盃洗に冷え爛の酒をつぐ。窓に腰かけ酒を呷る)

## 第二場 利根の渡し

利根川渡し場。秋草がところどころに咲いている。川には葦がところどころ茂っている。渡し船が岸を出て、もう艫に代つていて、船首の方は葦に隠れ見えなくなっている。

船夫が艫を押している。客が数人乗っている。どこかで「おうい——おうい」と呼ぶ声がする。

船夫 (陸の一方を向いて、手を振る) 駄目だ駄目だ。ちよつくら待つてくれ、行つて帰つてくるからよう。

渡し船が去つてしまう。

駒形茂兵衛、途中で食い物にありつき、前よりは健かになつている。

茂兵衛 おうい——おうい船頭さん——おうい。(駄目だ) はあッ、行つてしまった。(陸揚げをした庭石らしいのに腰かけ、川を見ながら、懐中

から食べ物を出す) 川を渡つて安孫子まで一里ぐらいたと、飯屋の人がそういつた、安孫子から小金<sup>こがね</sup>まで三里、そうは歩けない。いやあ、歩かなくちやいけないだ、歩こう歩こう。小金<sup>まご</sup>から松戸<sup>まつと</sup>へ二里だつていつた。松戸<sup>まつと</sup>から葛西<sup>かさい</sup>、千住まで四里。そうすると、あす中に親方の処まで行けるぞ。(食べ始める)

子守子が——前のは違ふ——負うた子を風車<sup>かた</sup>であやしながら来る。

子守子 (子守唄をうたつて、茂兵衛の傍を通る)

茂兵衛 (水が欲しくなり、川端に行き、水を掬<sup>く</sup>んで飲む)

弥八が升、北、良を引連れ、そつと忍び寄つてくる。

子守子 (びっくりして、一方に避け、怖々見ていゝる)

弥八 (升公等を制し、先頭になつて、そつと茂

兵衛の背後に寄る) エッ。(打ち据えんとする)

茂兵衛 (偶然、立つ)

北公 (棒を棄て) 野郎ッ。(諸手で、押そうとかかる)

茂兵衛 (引ッ外し、北公を背後から送り出す)

北公 (川の中へ翻筋斗<sup>もんどり</sup>打つて落つ)

弥八 さつきから手前を探していたんだ、どこを間誤<sup>まご</sup>間誤<sup>まご</sup>してやがった。

茂兵衛 銭を貰つたから、飯屋さんに寄つていたんだ。

升公 道理で、船頭に聞いても見かけなかつたという筈だ。

良公 引揚げちやあなくつて丁度よかつたな、弥八ちゃん。

弥八 手前をここで叩ッ挫くからそう思え。

茂兵衛 それよりも川へ落ちた人、いいかなあ。あの人泳げるのか。

良公 (茂兵衛に) こ奴ちツと變つてやがらあ。

弥八 人を舐<sup>な</sup>めてやがる。野郎ッ。(打つてかかる)

茂兵衛 何をする。(腹に耐えが出来るので負

けてはいないが、良と升とに左右から組まれ、負

けそうになる)

弥八 (得物で茂兵衛を打たんと振りかぶる)

子守子 (怖々今まで見ていたが思わず) 人殺し

いッ。

弥八 えッ。(慌てて振り向く)

茂兵衛 (良公、升公が「人殺しい」の叫びにぎよッ

とする隙に乗じて振り払い、落ちていた得物を

拾つて、二人を叩き倒し、弥八に向う)

弥八 (得物を投じ、長脇差へ手をかける) 抵抗

いすると、素ッ首を、叩き落すぞ。

茂兵衛 お前が何もしなければ、わしだつて何もし

ない。

弥八 そうは行かねえ。

茂兵衛 やるぞ。

弥八 (じりじり下がる)

茂兵衛 お前。さっきの姐さんをどうもしなかった

か。

弥八 お薦の阿魔か。あんなすべた。(又さがる)

茂兵衛 すべた、じゃあない。

弥八 すべた、だ、大すべた、だ、父なしッ子を生み

やがつて。茶屋女の癖にだらしのねえ。

茂兵衛 そんな人と違う。

弥八 違うもんか。そこらにいる子守ッ子に聞いて

みる。背中の赤ン坊は今年の春、あの阿魔が生

んだぬそッ、こだ。

茂兵衛 嘘をつけ、あの人が父なし子なんか生むも

のか、そんなことをいうと、こん畜生め。(弥八

に打つてかかる)

弥八 (争つてみたが敵わず、殴られて逃げる)

憶えてろッ。(去る)

良公、升公はそれを見て、弥八より一足先に

逃げ去る。

茂兵衛 憶えてろというのはお前達のことだ。腹が

くちくなればだれだつて強くなるんだ、よく憶え

とけ。

子守子 お角力さん、強かったねえ。

茂兵衛 え。ああ子守さんか、お前、見ていたのか。

子守子 ああ、始めから見ていたの。

茂兵衛 怖かつたらう。わしが悪いのではなかった

んだ。そう思つておくれ。

子守子 それは判つてるよ。船戸の弥あ公火事より怖い。馬鹿で無法で臍へそ曲り。そういつてあたいた達うたつてるのだから。

茂兵衛 川へ一人落ちたつげが。

子守子 ありやい、わしの北さ。もうどつかへ泳およいで

逃げちゃつてらあ。

茂兵衛 泳ぎを知つてれば、安心だ、なあ子守さん

その子、どこの子だ。

子守子 家の里うちツ子。

茂兵衛 本当に、安孫子屋のお薦さんの生んだ子

か。

子守子 そうさ。(赤ン坊が泣き出したので、茂兵

衛から離れて、あやしつ歩いて行く)

茂兵衛 (子守子に)なあ、その子、父ととなしツ——。

(いいかけてやめる)

子守子 (子守唄をうたつて行きかける)

い、わしの北公、葦を分けて、そツと這いあがる。

茂兵衛 (二云いやめてそらす眼に北公が見つかる)

北公 (泡かえるをくつて、蛙の如く、川へ飛び込む)

茂兵衛 おい。(とிட்டたが間に合わぬ)

子守子 (水音に驚き唄をやめて振り返り、何事も

ないと思いうたいつづける)

茂兵衛 (石に腰かけ、食い残りを頬張り始める)

行よしきり々子が遠くで、近くで、交かたみ代りに鳴いて

いる。

## 〔大詰〕

### 第一場 布施の川べり

十年程経つた後の春のころのこと。下総の国安孫子から南東一里ばかりの利根川に沿つた布施ふせは、その対岸が常陸の国戸頭とがしらである、その渡しを七里の渡しと称えている。

(布施は松戸方面から水海道へ往来にあたる。布施は布佐などと同様に中相馬なかそうまと呼ばれている土地)

布施弁天堂のある弁天山から少し離れて利根川が流れている。対岸は約半里の遠さ。

砂地へ曳きあげた、かなり大きな船を——船尾だけしか見えない——老船頭とその子の若者が膠たでている。

船の中で船大工がマ、キ、ハ、ダ、を打つ音がする。

老船頭 (船底に茅火をあてながら唄う) はあ、利根はよいとこ、上中下の、どこを見たとて、花が咲く。(若者に) この船も新造下しんぞうおろしてから八年かなあ、来年あたりウワ廻りかけずばなんめえのう。

若い男 なあにまだ来年ということはねえ、再来年さらいねんだどていいさ。なあ大工さん、そうだろうが。(船の中へ向つて話しかける、が、答えはなくて、マ、キ、ハ、ダ、かます打つ音のみする)

老船頭 船大工はマ、キ、ハ、ダ、かます音で耳が利かねえんだよう。

若い男 (唄う) はあ、いなさ吹こうが、ならい、が

吹こが、けさの寒さに、帰さりよか。

駒形の茂兵衛（三十三、四歳）角力をやめてグレてはいつた博徒仲間、約十年に鍛錬した体と共に、心もぐつと緊り、見違えるような男になっている。今は諸国をめぐる旅人風俗。道を誤つてここに来る。

茂兵衛（老船頭に）お仕事を相済みません。取手へ参るのには、ここの渡しからでござんすか。それとも川下の渡しへ行つた方がようござんしようか。

老船頭 ここからでもいいには良いが、取手のどこへ行くのか、先によつては下の渡しがいいか知れねえがのう。

茂兵衛 十年ばかり前に行つたことがあるのでねえ。お船頭さん、取手に安孫子屋という茶屋旅館みてえなことをしてる家が今でもござんしようか。

若い男 安孫子屋けえ。俺はよく知つてるが、そんな家、取手にやねえやあ。

老船頭 いやあ有るある有る。じゃねえ元あつたんだ。

茂兵衛 へえ——じゃ今はもうござんせんか。

老船頭 無え。八、九年前だったか、ばくち、打ちの奴が、いやあこれはご免なせえよ。ツイ口が、  
すべ 迂つた。

茂兵衛 構やいたしません。

老船頭 そうかね。安孫子屋は元繁昌していたが、流れの三太郎という親分が仕切つて買取つてから流行らねえ続きで、半年か一年かで止めてしまつた。だからこの男なぞ色気づいた頃にやもう無え、知らねえ筈だよ。

茂兵衛 へえ左様にござんすか。どうも親切によく教えてくださいました、有難う存じます。

老船頭（茂兵衛の慇懃さに、頗る好意を持つ）はい、いえ、何。もしまだ聞くことがあるなら、知つてる限り、喋舌るよう、その代り俺あ、た 燻でながら返事いうがねえ。

茂兵衛 お言葉に甘えて少々伺います。その安孫子屋に就いて内輪のことまでよく知つている人がお

りましようか、ご存じじゃござんせんか。

老船頭 船戸の弥八という人なら知ってるか知れねえ、流れの三太郎親分が流行病はやりやまいでコロリと死んだその跡をとった人だからねえ。

茂兵衛 船戸の弥八か。弥あ公とか弥あさんとか、以前いつた男ではござんせんか。

老船頭 知ってるのかね弥八を、八さんをね。

茂兵衛 いえ存じちやおりません、名前だけ聞いたような気がいたします。変なことを伺うようですが、弥八の評判はようござんすか。

老船頭 さあ。(云い洩つている)

茂兵衛 判りました。あ奴やつ、評判は良かねえんだ。

老船頭 (慌てて) そんなこともねえよう。

茂兵衛 なあに、ようござんす。もう一つ伺いてえのだが——ねえお船頭さん。失礼申しあげて腹を立てさせるか知れませんが、安孫子屋にいた女を一人でも二人でも、ご存じじゃござんすまいか。

老船頭 (迷惑そうに) な、なにを訊きくんだ、年寄りに。

茂兵衛 こ奴あ悪かった。ご免ください。

老船頭 やや、そういわれると却つて痛いだ。昔の

ことなら俺だつて、一度や二度はあすこで遊んだこともあるに。

茂兵衛 お薦さんという女を、もしや知つちやいませんでしようか。

老船頭 お薦ね、はてなあ、聞いたようだが、どの女のことだつたかなあ。(船の中に向つて声をかける) おい清大工せい、ちよつとこいよ。

老いたる船大工清吉が、船尾の上に半身を出す。

清大工 何だあ。用かあ。

老船頭 お前、取手の安孫子屋の阿魔あまに凝こつたことがあつたのう。

清大工 (破顔して) 何をいうだえ。(顔を引込める)

老船頭 おうい清大工よう。冗談じやうだんにきくではねえぞ。ここにいなさる人が知れたがつてるんだ。この人はだれか尋ねてるらしいだ。

清大工 (再び半身を見せて) ほうか。だれのこと

だね。

茂兵衛 お仕事にお手をとめさせて相済みません。

もしや、十年ばかり前に、安孫子屋にいた女で、

お薦さんという人をご存じではございませんで

しょうか。

清大工 お薦というのかね。憶えていねえなあ。永

くいた女なら大抵知ってるだがなあ。

茂兵衛 その時は二十三、四、色の白い、美しい女で

したが——ご存じございませんか。

清大工 (老船頭に) お前知ってねえのか。

老船頭 知つてればお前を呼びはしねえ。

清大工 随分お前も凝つて行つてたによう。

老船頭 利根川船頭は一つ女に凝らねえさ。それが

定法さ。

清大工 そうでねえ。お前の凝つてたのは、ええ

と、お松といたつたけかなあ。

老船頭 そりやお前のだ。

清大工 そうそう。俺の女がお松だ、えらい酒食くらい

だつたけなあ。

老船頭 あの頃はまだ俺もお前も、まだまだピンピ

ンしてたつつけのう。

若い男 (嚙たでている)

清大工 (感慨にうたれ、茫ぼうとしている)

茂兵衛 お妨さまたげして相済みません。取手へ参つて、

判らぬまでも捜して見ましよう。

老船頭 はいはい。そんなら下の渡しがいくらか近

かろう。

清大工 どれ仕事しべいか。(船内にはいる。やが

て、マキ、ハダを打つ音がする)

茂兵衛 ご免ください。(笠をかむつて行きかける)

この辺の博徒親分波一里儀十の子分、おぶの

甚太、籠彦、堀下ほりさげ根吉ねきちの三人が飛んでくる。

籠彦 (物もいわず茂兵衛の笠を引ツ剥ぐ)

甚太 (茂兵衛の前に立ち塞がる)

根吉 (茂兵衛の背後から組みつく)

茂兵衛 (彦の肩を掴んで砂地に叩きつけ根吉の首

筋へ手をかけ、前へ廻して蹴放し、打つてかかる

甚太の小手をとつて投げつける) 何をしやがる。

(笠の台座をとつて棄てる)



根吉 いけねえいけねえ、人違いだ。

甚太 どうも、これは誠に済みません。

籠彦 (二人に罪を塗りつけるように) だからいわねえことじゃねえ、違つてやしねえか、大丈夫かと俺が念を押したんだ。

根吉 何をいやがる、手前が、あれだあれだと  
いったんじゃねえか。

甚太 そうだとも、彦ッペがいけねえんだ。

籠彦 ちえッ俺ばかり悪者にするなよ。

茂兵衛 やい。もつとこつちへ寄れ。

甚太 へ。

茂兵衛 船頭衆、大工さんがお仕事をなすつてい  
る。邪魔になるからもつとこつちへ寄れ。

籠彦 へえ。

老船頭と若い男とは船の傍で、清大工は船の上  
に半身を見せ、共に成行きを見ている。

茂兵衛 手前達はブ職か。

籠彦 へえ。自分より発します。お控えくださ  
い。

茂兵衛 俺あ無作法だ。仁義は受けねえ。

籠彦 え。

茂兵衛 一家はどこだ。

籠彦 かよう土足裾取りましてご挨拶失礼さんで  
ござんすがご免なさんせ、向いまして上さんとこ  
んど初めてのお目通りでござんす、自分は総州葛  
飾の郡柴崎は波一里儀十若い者、籠屋彦左衛門と  
発し、ご賢察の通りしがないう者でござんす。

茂兵衛 よし判つた。お前は。

甚太 (仕方なく) おぶの甚太郎といひます。

根吉 (茂兵衛が眼で訊いているので) 俺あ堀下  
げ根吉だ。

茂兵衛 波一里儀十さんの吩咐でやったことか、そ  
れとも一存か。

根吉 (彦が、「親分がコレコレいうから」とい  
いそうなので、押ッ冠せて) 俺達一存だ。

茂兵衛 その仔細は。

根吉 だから詫びをいつている。

茂兵衛 詫びで済ます気でやったのか。

籠彦 そ、そりや云い懸りだあ。

茂兵衛 次第によつては勘弁する。次第によつちや

あ、勘弁ならねえ。というのは更めてあらたいうまでもねえ、ブ職同士のことだからなあ。ええ、そうでござんしよう、そうだろうが。

籠彦 へえ。

茂兵衛 どういう筋で間違えた、聞こうぜ。おうお前まえいえ。(一番確しつりしていそうな根吉を指さす)

根吉 この土地に荒れ寺が一軒あるんで、そこがちよくちよくシキになる。きょうも昼間から場がひらけたところ、見たことのねえ風来坊がきて、初めは何の不思議もなかったが、だんだんやりとりが重かさなると、そ奴の素振りが怪しくなつた、で。

茂兵衛 その男と人違いか、何だその男は、場荒しか。

根吉 イカサマ師だつたんだ、気がついた時より奴が逃げた方が一足先。そこで手分けて追手に出て、どうも飛んだ失礼をいたしちやいました。

茂兵衛 そのイカサマ師が俺に似てるのか。

根吉 そういう訳じゃねえんだが。

茂兵衛 おう、お前に聞かぜ。(甚太を指さし)イ

カサマ師は俺みたいに旅人姿か。

甚太 角帯をね、角帯をちゃんちゃんと締めて。

茂兵衛 年ごろも人相も違うのか。

甚太 そうなんです。

茂兵衛 似たところなしの違うだらけで、イキナリ笠を引ツ剥いで組んでかかる、打つてかかるじゃあ、気の早い者ならスパリとやるぜ。恩には着せねえが俺だから、今のぐらいのところとで止まっただ。馬鹿あ、以来、気をつけろい。(川下へ行つてしまふ)

籠彦 何て野郎だ、厭な奴だつたなあ。

甚太 ひでえ目にあつちやつた。だれだい、イカサマ野郎が早替りはやかりで、あんな姿に化けたんだと、伶俐れいれいそうにいやがったのは。

籠彦 (頭を搔く)

根吉 (茂兵衛を見送っている)てえした男らしい。おお、度肚どぶを抜かれて名前を聞いとくのを忘れちやつた。さぞあの人は俺達を嗤わらつてるだらう。

草角力の三役まで取った波一里儀十が、子分の筋市と溢れ浪土河岸山鬼かしま一郎と来る。

根吉 こりや親分さん。先生も。(辞儀をする)

儀十 イカサマ野郎はこの頃取手へきてる奴だつたとよ。これから行つて厳しく仕置きをするんだ。三人とも来い。

籠彦 へえ、お供します。

筋市 (根吉等に誇り氣に) 理詰めで俺達がビシビシ攻めつけて見せるから見ててくれ。

河岸山 (刀を叩いて) この方となると最後のところは、是非とも拙者の受持じゃ。ハハハ。

甚太 親分。(今のあつたことをいいかける)

根吉 (甚太の袂をぐいと曳いて黙つていろと眼

顔でいう)

儀十 彦。上かみの渡しへ先へ行つて、船が出そうだったら待たせとけ。

籠彦 へえい。(飛んで行く)

儀十 さあ行こう。きようは屹と面白えぜ。

上の渡しを指して儀十等は去る。話し声が少しの間、聞えてくる。イカサマ師といわれた

船印彫師辰三郎(三十五、六歳) 堅気に見える粹な服装か、たちで、眼を配りつつ来る。

辰三郎 (髪の中より采さいを出し捨てる)

清大工 (その以前に船の内にはいつてマ、キ、ハ、ダ、を打っている)

老船頭 (若い男と共に、今また糲たでかけた手をやめて、辰三郎に注目する。「この人が、儀十等に

探されているのではないか」と思い) もし、もし。辰三郎 えッ。(びっくりして、川下へ逃げ去る)

老船頭 あ——そつと教えてやろうと思つたのに。若い男 だけれど、イカサマ賭博ばくちをしたというから、どうもこれ仕方がねえさ。

清大工 (船の上へ顔を出す) 又何かあつたのか。

老船頭 なあに、人が一人、駈けて行つただけだに。

清大工 あれだね。どんどん駈けて行かあ。

老船頭は糲たでを続ける。

船頭唄が風に送られて遠く近く、聞えてくる。

## 第二場 お薦の家

取手の宿場から少し離れ、利根川をやや遠く望む高地にある一軒家の内。

(その家は古く建てられたもので、軒も傾き、壁も破れている。窓のある土間の上に、川魚の串刺しが吊るしてある。畳敷の方には仏壇代りの箱に男名前の位牌が置いてある。片隅に飴売りに出る着物、笠などと道具がある。この家は母子二人ぎりで、母が飴売りに出て生活しているのだと直ぐわかる)

お薦 (三十三、四歳) 子の愛にひかされて、独り身で、細々と生計を立てている。

お薦 (飴の景物につける小さな幟と吹流しを作っている)

お君 (十歳か十一歳) 折ってきた山桜の枝を位牌に供えている。

街の方で子供の声がする。

子供 (声) 夕焼け、小焼け、あしたも天気になあれ。夕焼け、小焼け、あしたも天気になあれ。(遠くなる)

お薦 お君ちゃん。お前いい子だ、燈火つけておくれな。(吹流しを作り続ける)

お君 ああ。

お薦 気をつけてね、油をこぼさないように。

お君 ああ。(燧石を摺る、誤つて指を打つ) あ痛ッ。

お薦 (喫驚して起つ) どうしたの。指を打ったんじゃないかい。どれお見せ。まあ血が出て来た。痛いだろうね、我慢おし、ね。葉つけてあげるから、自分できつく抑えといで。(昔の名残りの葛籠の底から、成田山の疵薬を出す。葉は辛うじて残っている) 少しシミるけれど、もうこれで大丈夫、今、結えといてあげるよ。(小布れを探して結えてやる) さあ、もういい。あしたの朝、もう癒っているだろうよ。(燧石を摺り、行燈に灯を点ずる)

入口を手荒く開けて、い、わ、しの北公、前より約十年老けている。土間へはいる。入口の外に波一里儀十等が立っている。

北公 (見廻して) ちえツ、薄ツ汚ねえなあ。

お蔦 どなた。おや。

北公 ちよいちよ見掛けるから、万更、忘れっ放しにもなつていめえ、北造だよ。(外の儀十等に) どうかおはいりなすってください。おいお蔦。きようは船戸の弥八親分の名代に、客人のご案内をしてきたんだ。粗相があつちやならねえぞ。

お蔦 (ぐツと疝に障ってきたが、我慢して黙っている、お君が怖がっているので手招ぎして抱き寄せる)

儀十 (筋市、根吉をつれて土間へはいる)

河岸山、彦、甚太は外にあり、開放あけつぱなしの入口の外を往つたり来たりしている。

北公 向むかう地じの親分、どうかご遠慮なくお検あつためくめださい。

儀十 じゃそうしよう。(お蔦に) 俺あ川向うの

中相馬なかそうまにいる波一里の儀十だ。

お蔦 どういうことでございましょう。

儀十 こんなこと、俺がじかにいわずともだ。市、

訊きいて見ろ。

筋市 おツ。(ずツと進み出て) —— お蔦、何だ

そんな面しやがって、お前の亭主に用があつてきたんだ。亭主を出しな。

お蔦 亭主ですつて、ホホホ。あたしに亭主があるもんですか。冗談じやうたんでしよう。

筋市 おツと、そうは抜けさせねえ。ありや何だ、あすこの位牌は。

お蔦 ありやあたしの亭主の俗名が書いてあるんです。

筋市 その俗名の男を出すんだ。

お蔦 お位牌になつた人が出せますか。強たつて用があるのならようござんす、お君きみちゃん、お父とうさんのお位牌もつといで。

お君 (母の顔を見て心配そうに) いいの。

お蔦 ああ。この人達は、お父さんのお位牌にお話があるんだとき。

お君 (位牌をとりに行きかける)

筋市 位牌が口でも聞きやしめえし、そんな物は  
いらねえ。

お薦 (お君に) いらないてからお君ちゃん、い  
いよ。

儀十 ええ手間がかかる。市、その阿魔と餓鬼を  
押えつけれ、他の者は家探<sup>やさ</sup>ししろ。

外から彦、甚太が駈け込む、河岸山は入口の  
外に立って内を見ている。

お薦 (押えんとする市の手を振り払い、掴みか  
かりそうにする北公に、吹流しにする色紙入りの  
箆<sup>ざる</sup>を投げつけ、お君を庇つて隅の壁に倚る) 何を  
するんだ、女子供たった二人の家へ、大の男が大  
勢きて、腕<sup>うで</sup>ずく沙汰を何だつてするんだ。あたし  
にそんなことをされる弱い尻はないんだ。

儀十 お前になくても亭主にある。構うこたあね  
え、船戸のが承知してるんだ、押え付けろ。家探  
ししろ。

お薦 (市に押えつけられる) 何をするんだ。ば  
くち打ちの癖に堅気に向つて、そんなことをして

済むと思うのか。

北公 (お君の襟を押えつけている)

儀十 (甚太、彦、根吉を指揮して、家探しをさ  
せる)

河岸山 (土間にはいつている)

お君 お母さん、お母さん。

北公 ピイピイいうな。(お君の口を手で蓋する)

お薦 (北に) な、なにするんだ、人の大事な子に  
そんなことをして、息が苦しいじゃないか。放し  
てやつておくれ、頼むから放してやつておくれ。

後生<sup>ごしょう</sup>だからそんなことをしないでおくんさい。

筋市 蒼蠅<sup>うるさ</sup>い、黙れ。

お薦 何だつて大事な子にそんなことを。(猛然  
と起ちかかる)

筋市 ええいッ。(手荒く引据える)

儀十 (自分も一緒になつて家探しする。が、何  
者もない)

河岸山 (儀十に) どうだな親分。居らぬらしいで  
はないか。

儀十 どこかへ隠れやがったか。みんな、家探し

は止める。同じ処を二度三度検めたところで仕方がねえ、市、手を放せ。

筋市 さあ放してやらあ。(お蔦から離れる)

北公 俺も手を放してやらあ。(お君をお蔦の方

へ突ツ放す)

お蔦 (お君を薙ひと抱き緊しめ、儀十等に敵意の眼を向ける)

儀十 根吉、手前の方がいい。阿魔に泥を吐かせろ。

根吉 へえ。(お蔦に) ツイ手荒くなつて済まなかつた、これには訳があるんだ。お前の亭主といふのは辰三郎、あの位牌に書いてあるからそうなんだろう。その辰三郎は死んでやしねえ、生きているんだ。

お蔦 ——えツ、そ、そりや本当なんですか。

根吉 本当とも、現に俺までがこの眼で見ただ。

お蔦 どうして辰三郎だと、友達でもないお前さんに判つたんです。

根吉 俺あもとより辰三郎なんて人知りやしね

えが、元はこの土地にいた升さんという人が、見知つていて、あの男なら関宿の浜棟梁の処だしほりしにいた船印彫師の辰三郎といつて、十年余り前に行方知れずになつた男といつたので判つたんだ。

お蔦 まあ——あの、生きていてくれたのか。お君ちゃんお父さん生きてるんだつて。

お君 どこへ行つてるんだらう。早くお家うちへくればいいのに。

河岸山 ははあ、こりやなかなか旨うまく胡麻化すて。

儀十 そうだね。へん。(お蔦母子を侮蔑する)

根吉 辰三郎という男とお前さんとは、そこにいる子まで生なした深ふけえ伸のびだと判つてみれば、利根川を挟んで三堀布施ほりふせ、安孫子で姿を見かけたからは、どこへ行くものか女房子供のところと、こう見込みをつけるのが定式だらう。

お蔦 そう伺えばよく判ります。嘘も隠しもありません、あたし達母子は辰三郎の姿すらまだ見ないのでございます。

根吉 親分、この人のいつてることは、嘘じやねえと思ひますが。

儀十 じゃ、まだ寄りつかねえのか。

河岸山 どこかで余温ほよどりを冷さましてから来る心算つもりか知れぬな。

籠彦 屹とそうだ。

筋市 (彦に) 黙ってるい。

北公 じゃあこうなすつては如何いかにで、一先ず手前

親分の処までお引揚げになつては。

儀十 帰りには是非寄ると約束だ、では、お振舞

いに与あずかろうか。

北公 直ぐに手前親分の方から、ここの家うちへは張り番を出しますから、皆さん。どうぞ。

儀十 市と彦とはここへ残れ。

北公 それでは恐れ入ります、皆さんどうかご一

緒に、目と鼻の間ですから、張り番あがが上るのは直ぐでさあ。

儀十 じゃお言葉に随いましょう。さ、行こう。

入口から外へ北公、続いて儀十等が出て行く。最後は根吉。

根吉 おかみさん、もし辰三郎が帰ってきたら、

こう成れば仕方がねえから、覚悟しさまして終えという

がいい。

お薦 もし。あの、家の人は何をしたんでしよう。

根吉 生馬の眼を抜くような、ブ職の間では許されねえ悪いことをね。

お薦 と申しますと。

根吉 堅気に化けたイカサマ師なんだ。(外へ出て戸を閉める)

お薦 まあ。(喫驚する)

お君 お母さん、もう済んだの。何、今の人のいったこと。

お薦 何、何んでもないさ、子供には判らないことなのさ。(散乱した色紙さきを箆ざるに入れる) それよ

か、もう直ぎ、お父さんが屹と帰ってくるよ。

お君 お父さんでどんな人。

お薦 お君ちゃんは、どんなお父さんだか知らない筈だ、お前が生れた時はもういなかったんだもの。

お君 あたい少しお父さんを憶えてる。

お薦 どうして。



お君 だって、あたいがもつと小さい時、お菓子  
をくれていった人、あれが屹とお父さんだわ。

お薦 そんなことがあつたかねえ。事によると  
そうかも知れない。(土間の窓が外からそつと開  
く) あれ。(取り纏るお君を抱く)

窓から辰三郎が顔を出す。今まで近くに潜ん  
でいたのである。

辰三郎 あたしだ。

お薦 どなた、どなた。(起つて行き、じつと見  
る) まあ。

辰三郎 奴等が帰つて行つたのは知つているが、だ  
れも残つてやしないだろうな。

お薦 ええ、だれも。お君ちゃん、お父さんだよ。

お君 (土間へ駆け出し、入口を開ける) お父さ  
ん。

お薦 そんな声するんじゃない。

辰三郎 (窓を閉めて入口へ廻る)

お君 お父さん、あたいのお父さん。わあ。

辰三郎 (お君を抱き緊め) お父さん、逢いたかつ  
たんだ。(咽び泣く)

お薦 (入口を閉め、父子を畳敷へ行かせ、戸に  
心張棒をかう) 早く、そつちへ行つて、早くさ。  
(畳敷に行く)

辰三郎 お薦、永い間の苦勞、濟まない。

お薦 お前さん、よく無事でいておくれだ。あた  
し達にはそれが何よりだよ。

辰三郎 何から何まで濟まないことだらけだ。勘弁  
してくれ。

お薦 何をいうのさ。

辰三郎 薄情な男をよく忘れないで、こうやってい  
てくれた。親の死水しにみずもとらなかつた不孝の罰が今  
身に耐こたえる。これからは女房子おほの傍そばを、死ぬまで  
必ず離れはしない。

お薦 そうしとくれ。ねえ、この子を見てやつて  
おくれ。

お君 (二人の間に割込み、手習双紙の字を得意  
になつて見せ) お父さん、あたいの字も知つて  
るよ。

辰三郎 うんうん。(お薦に) 永い間の不人情が今  
更、我が身ながら愛想がつきる。

お薦 決して不人情じゃないよ、茶屋旅籠の女だもの、実があるかないか、疑うのも無理じゃない。

辰三郎 それをいつてくれるな、辛い。でもなあ、

志州鳥羽の港にいる時、こつちにいた頃知つていた良公よしこうつて奴があつたらう、あ奴が何か間違ひをして、逃げ歩いて鳥羽の港へきたんだ。良公からお前のことを聞いた時、女なんて到る処で招かずとも靡なびいてくるものと、永い間己惚うぬぼれていた夢が一ぺんにさめてしまった。それから、こつちへ帰ろうと、船印ふねしを彫るはもとより、手当り次第に精を出し、一時は少し銭を貯めたが、病わづらつたので駄目になり、又稼いでいるうちに考えれば居ても起つても耐らないので、土産らしい物を持ちもしないで帰りは帰つてきたのだが。

お薦 ああそれで判つた。

辰三郎 今の奴等が喋舌しゃべつたらうから隠しはしない。いくら何でも不人情をした上に、裸一貫では、敷居一つが越し難いので、もとは慰みに憶えたイカサマばくちを。(胴巻に入れた金を出し)

見てくれ。剃刀の刃渡りだとは思ひながら、金が欲しさに手を振つて、こんなに勝つて取りは取つたが、直ぐに祟たたりが廻つてきている。こ、これじゃあ、何にもなりやしない。

お薦 そんなに悔むには及ばない、夫婦親子三人で今から直ぐに、この土地を後にしよう。もしやお前さんが帰るか帰るか、死んだのだろうと思ひながら居つたこの土地、もう未練なんかありやしない。

辰三郎 そうだ。どこへ行つても日は照つてる。逃げよう。

お君 (喫驚して) 逃げるの。

お薦 そうじゃないそうじゃない。お母さんの国へ帰つて行こう、ね。

お君 ああ、あの唄のところだね。

お薦 お君ちゃん、お母さんよりあの唄はうまいねえ。(辰三郎に) お前さん、そりや何。

辰三郎 (手習双紙の表紙の余白に、儀十宛の書残しをしている) これか。これはイカサマで取つた金を返す、それに付けてやる手紙なんだ。どう

で又、奴等はここへ来るだろうから、目に付くに極つている。(金を置く)

お薦 汚ない金なら欲しくはない。

辰三郎 金は欲しい咽喉から手が出る程。だが、もし捕まれば腕一本へシ折られるか、五本の指をへシ折られるか、軽いところで中指かけて二本は不具かたわにされるだろう。不具になつては又お前達に苦勞をかける、それが怖いので欲しくてならないこの金だが、ここへ残して置く心算だ。金が戻れば、あ奴等は追いかけてなぞこなかろう。

お薦 そうだと有難いが、あ奴等ではどうだかねえ。

辰三郎 お君はおいらが背負おぶつて行く。

お薦 じゃあたしは、何もないけれど、せめて子供の物だけは。まあこの子はお父さんにもう背負おぶさるの。お待ち、まだだよ。(持つて行く荷をってくる)

辰三郎 何、いいやな。(お君を負いかける)

お君 (辰三郎に)お母さんの国つて、知つてる。

(頬に触り、肩を撫ぜなどしている)

辰三郎 (曖昧ながら) ああ知つてるよ。(お君の片手を握つている)

お君 じゃ唄も知つてるね。

辰三郎 ああ、知つてるとも。(両手を両手で握る)  
お君 (得意になつてうたう) おらちや友達あ、菜種の花よ。ハア、どっこいしよのしよ。

お薦 (お君の唄を制そうとする)

辰三郎 (お君の手を撫ぜつつ聞いている)

お君 (唄う) 盛り過ぎれば、オワラ、ちらばらと。

土間の窓が開いて、茂兵衛が顔を出し、内を覗のぞいている。

お薦 (偶然気がついて) あら。

辰三郎 え。

急に窓が閉められる。

お君 (唄う) ハア、どっこいしよのしよ。これ

お母さんに教わつたの。

辰三郎 (お薦に) 何だ。

お薦 気の故せいかしら、今その窓から、だれだか

覗いたようだつたけれど。

辰三郎 えッ。(お君をお薦の方にやり、土間へ向う)

入口の戸が外から叩かれる。

お薦 あッ、来たッ。(纏めた荷を抛ち、お君を

引寄せ、背に負いかける)

辰三郎 (得物を求める)

茂兵衛 (外から声) ご免ください、相済みません。

ちよつと申しあげます。お聞きくださいませ。

辰三郎 (度胸を据えて入口に行き、心張棒に手をかける)

茂兵衛 (声) こちらはお薦さんと仰有います方の

お家じやございませんか、わたくしは川向うの人

と交際を持たねえ者でござんす。

辰三郎 (低声) お薦。お前を呼んでいる。

お薦 あたしを、そんな人はない筈だ。

辰三郎 (聞き澄まし、お薦に向いて) 茂兵衛とい

う人だというが。(お薦が知らないと首を振る、

で、思い切つて戸を開ける)

茂兵衛 (土間にはいり) 相済みません、戸締りは

元通り、なすつて置くがようござんす。

辰三郎 お前さんはどなた。

茂兵衛 お眼にかかったことはござんせんが、おかみさんのお世話になった者でござんす。

辰三郎 え。

茂兵衛 (喫驚しながら怪しんでいるお薦に向い、

上り框に両手を突き重ね、頭をさげて小腰をかか

め、楽旅仁義の型で) お久し振りでござんした。

その節はお助けを頂き有難うござんした。

お薦 そういうお前さんは、どなた、なんでございましょう。

茂兵衛 お見忘れはごもつともでござんす。茂兵衛

でござんす。

お薦 (独り言を) 思い出せないねえ。

茂兵衛 お約束を無にいたし、こんな者に成り果

てまして、お目通りはいたさねえ筈でござんし

たが、十年振りでこつちの方へ、流れてきたので

思い出して、他所ながらお尋ねしてえと、きよう

小半日うるついで、それでも判らずにおりまし

たが、飲み屋の女が唄う鼻唄から気がついて、聞

いてみたら女館屋の口真似だとか、それを手蔓てづるに方々聞き、ここへ来てみると子供の声で、昔聞いた節の唄、お薦さん茂兵衛はモノに成り損ねましたが、ご恩返しごんがしの真似事がいたしてえ。お納めを願います。(手早く金包を置いて)ご縁次第、又お目にかかります。ご免なさんせ。(帰りかける)

お薦 あ、待つてください。

辰三郎 (お薦に) 知らない人なのか。

お薦 ああ、憶えがないんだ。

茂兵衛 思ひ出されねえのは却って仕合せでござんす、あ奴いつかとわかつては面目ねえ。立退くなら早いがいい。事によつたら一里ばかりは。ご免なさんせ。(戸を開けて出て行く)

お薦 だれだろう。

辰三郎 お君の唄を聞いたといったが、国の知った人ではないのか。

お薦 いいえ、違う。判らないもの仕様がな。

地獄で仏とはこのことかしら。頂いたこのお金があるから、旅へ出て苦勞はない。

辰三郎 手間どつてしまった。逃げる工夫はいくら

もある。さあ、ここを出てしまおう。

お薦 あい。

再び入口の戸が開いて、引返してきた茂兵衛がはいってくる。

茂兵衛 (驚く夫婦を制して) 出ちやいけねえ。悪いことになってきました。

辰三郎 お薦、とうとう逃げ遅れた。逢つて直ぐだが、お別れだ、お君を頼む。

お君 (辰三郎に縋り) どこへ行くの。厭だ、一緒に行こう、お母さんもよう。

お薦 お前さん、不具かたわにされても、あたしは傍そばを離れやしないよ。

茂兵衛 大丈夫、そんなことを奴等にさせるもんじゃござんせん。やツ、家の近くまでやつてきたな。お薦さん、子供をキツチリ抱いて、ご亭主の傍にびつたり付いて。(外の様子に耳を向け) この家から外へ出るな。

辰三郎 えッ。

お薦 (じつと茂兵衛を見ている。見憶えがあるような気がしてきている)

茂兵衛 あらまし形かたがついたら、その時あ親子三人、志こころす方へ飛んで行くのだ。(外から戸をたた敲く。心張棒をとつて振つてみる)

お蔭 あッ、思い出した。

茂兵衛 そうでござんすか。面目ねえ。(戸を開く、

彦が顔を出すのを突き出し外へ出て戸を閉める)

お蔭 (辰三郎に、茂兵衛のことを語る)

辰三郎 (驚きの余り、小さくなっているお君を背

負いつつ、お蔭の囁きを聞く)

外に喧騒が激しく起る。

### 第三場 軒の山桜

お蔭の家の前、桜の木の古い木と若木と二本植わつてあり、花が咲いている。

利根川が家の横にやや遠く見える。

茂兵衛が入口の前に棒を掲げ立っている。

市、甚太、彦が茂兵衛に肉薄し、根吉は少し

離れている。

河岸山は儀十の傍に付いている。その一方に、いわしの北公が二、三人つれて、立会人格で見ている。

茂兵衛 (黙つて睨んでいる)

市甚彦 (三人は口々に「邪魔だ退どけ」「退けつた

ら退け」「退かねえか野郎」と騒々しく俄鳴り立

てている)

儀十 静まれ。(茂兵衛に) どの何者か知らね

えが、邪魔するな、退け。この家のイカサマ師の

仲間だというなら、次手に睡ねむらせてやつてもいい

ぞ。

河岸山 (儀十に) 脛を一本、ちよつとやりますか

な。

茂兵衛 手前か儀十とは。中相馬の人達に聞いて

みる、評判が悪いぞ。手前よく堅気を脅かすと

あ、悪い癖だ。そんな奴には痛い目させるが一番

薬だ。

籠彦 何だと、ナマいうな。(猪口才ちよこさいに出る)

茂兵衛 まだ懲りねえか。そらよッ。(彦を叩きの

めし、市、甚を叩き伏せ。河岸山が抜き討ちにかかると、棒をすて、取つて投げて目をまわさずのが角力のワザ)

儀十 (角力のワザならこちらの得手で、ニヤリとして、肌脱ぎとなり) 野郎、一騎打ちだ。棒をとるな、棄てろ。

茂兵衛 よし。(棒を棄てる)

根吉 (今までじつと見ている。敢然として儀十に先んじ茂兵衛にかかる)

茂兵衛 (押え付けて顔を見る) お前はこの中では少しマシだ。退いてろ。

根吉 俺達には理も非もねえ。たった一つ意地ばかりだ。(飛びかかる)

茂兵衛 (押え込んで) そんならお前ちつとの間、静かになれ。(当身を食わせ、倒れるを少し介錯して、地に寝かす)

儀十 野郎ッ。こいつ。

茂兵衛 何をいやがる。(儀十を突き立て突き立て、小手をとつてブン廻し、手許に引付け家の中へ

向つて) あらまし形はついたようでござんす。(儀十の急所を圧す)

儀十 (氣絶する)

お君を負うた辰三郎、少し、荷を持ったお蔭が出来ただけの旅装で出てくる。

茂兵衛 飛ぶには今が潮時でござんす。お立ちなさがようござんす。

辰三郎 お蔭から話を聞きました。僅なことをいたしましたのに。

茂兵衛 いらねえ辞儀だ。早いが一だ。

お蔭 (人の倒れ伏すを見て) あッ。

茂兵衛 なあに死切りじやござんせん。やがて、この世へ息が戻る奴ばかり。

辰三郎 それでは茂兵衛さん。ご丈夫で。

お蔭 お名残りが惜しいけれど。

茂兵衛 お行きなさんせ早いところで。仲よく丈夫でおくらしなさんせ。(辰三郎夫婦が見返りながら去つて行くのを見送り) ああお蔭さん、棒ッ

切れを振り廻してする茂兵衛の、これが、十年前に、櫛、簪、巾着ぐるみ、意見を貰つた姐さんに、

せめて、見て貰う駒形の、しがねえ姿の、横綱の  
土俵入りでござんす。(入口から家の中へはいる)

茂兵衛が桜の下に佇む。

茂兵衛 (気絶している者共を見張っている)

幕

昭和六年五月作

## 後註

- 一 (ここから30字詰め)
- 二 (ここ)で字詰め終わり



底本：「長谷川伸傑作選 暎の母」国書刊行会

2008（平成 20）年 5 月 15 日初版第 1 刷発行

底本の親本：「長谷川伸全集 第十六卷」朝日新聞社

1972（昭和 47）年 6 月 15 日発行

初出：「中央公論」

1931（昭和 6）年 6 月号

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそって、あらためました。

入力：門田裕志

校正：雪森

2018 年 2 月 25 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。